

最優秀賞

「帰り道」

千葉県 印西市立内野小学校 四年

成沢 希望

みんなじろじろ兄ちゃんを見ている。おでこにいっぱい汗をため杖をつく兄ちゃんは、ぴよぴよこはねるようにして歩く。

デパートでぼくは兄ちゃんにほしかったおもちゃを買ってもらった。家からこの店まではずいぶんと遠いけれど、兄ちゃんはやくそく通り夏休みバスに乗って連れてきてくれた。兄ちゃんは生まれたときから足が動かない。リハビリを重ねやっと杖をついて歩けるようになったが、こんなに遠くまで歩いたのは初めてだ。ぼくがとても心配になったのは、兄ちゃんが帰りはバスを使わずに歩こうと言ったからだ。

「お母さんにはバスに乗ったことにしよう」

帰り道、兄ちゃんは何度も日かげにこしを下ろして、吹き出してくる汗をふいている。

ぼくもつかれていつしよにこしを下ろした。

「兄ちゃんジュース飲みたい」

兄ちゃんは困ったような顔をして百円玉をひとつくれた。

「百円じゃ買えないよ」

「そのホームセンターは百円だから、好きなジュース買っておいで、兄ちゃんはこちらで待っているから」

ぼくが、ジュースを買って帰ると、兄ちゃんは木の下で横になっていた。

「兄ちゃん、兄ちゃん」

何度声をかけても兄ちゃんは答えてくれなかった。ぼくはあわてて兄ちゃんのけいたい電話でお母さん呼んだ。お母さんは真っ青になって車で飛んできた。兄ちゃんに冷たいお水を飲ませるとまもなく起きた。

「ごめんなさい」

「本当にあなたはばかね」

家に帰るとお母さんはそう言ったけれど、それほどおこってはいない。兄ちゃんは無理をしすぎて、脱水しょうじょうになったそうだ。ぼくは兄ちゃんが買ってくれたジュースをコップに分けて持ってくる。

「うまいなあ。ありがとう」

ぼくのほしいおもちゃが高かったので、兄ちゃんは自分のおこずかいを全部使ってしまった。帰りのバス代がないから兄ちゃんは必死に歩いた。片道一時間もかかる道を、不自由な足でせい一杯がんばった。最後に残った百円までぼくのために使ってくれ、ぼくがこのことを知ったときもただ笑っているだけだ。

「そんなにがんばるなよ兄ちゃん」

と聞いたけれど、それよりも先にぼくは心の中で何度も兄ちゃんに

「ありがとう」

と叫んでいた。